

## 「それは+X」型の転換用法について

金 善 美

### 1. はじめに

話題の転換用法として見なされている接続表現には、以下のような形式がある<sup>(註1)</sup>。

・さて、では、ところで、しかし、それにしても、それで、そういえば、それより、それはそうと、それはそれとして、それはともかく、それはさておき、話は変わりますが、……

この中には「さて、ところで…」のように従来から「転換」型に分類されるものから、「それで」のような順接や「しかし、それにしても」のような逆接に分類されるものまで幅広く含まれている<sup>(註2)</sup>。そして、「それより、それはそうと…」のような指示詞「それ」を形態の一部に持っているものも多く見られる。このように転換に用いられる接続表現はさまざまであるが、その中でも特に下線部(=)のような形式が目につく。それらは形態的に指示詞「それ」に助詞「は」が複合した「それは」を持っており、その後ろにそれぞれ異なる要素が来ている。即ち、共通して「それは～」という構造をなしており、本稿ではこれを「それは+X」型と呼ぶことにする。

この「それは+X」型の転換の機能については市川孝(1973)、田中章夫(1984)の指摘があるが、これらは接続詞の分類の中での簡単な記述に過ぎない。市川は「それはそれとして」を「転換型」(前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型)の「放任」に位置づけている。田中は「それはそれとして」「それはそうと」を挙げており、「それはそれとして」は「それまでの話に、いったんしめくくりをつけて、新しい話題に移るときに用いられるもの」とし、「それはそうと」は「まったく別の話を切り出して、新たな話題を持ち出すときに用いるもの」とする。また、川端元子(2002)は「それより」の話題転換的用法を指摘しながら、「それはそうと」は「重要事項の想起」、「それはともかく」「それはさておき」は「軌道修正、本題回帰」の用法がある、と言っているが、これもやはり簡単な言及にすぎない。このように従来の研究では「それは+X」型について詳細に言及されず、概ね接続詞の分類の中で簡単に触れる程度に留まっている。

上でも述べたように、「それは+X」型は各形式に共通する要素の「それは」とそれぞれ異なる要素の「X」を持っているが、「X」にはどのような要素が入り得るのか、「それは+X」型は何らかのルールに基づいて生産される接続表現であるのか、等のさまざまな疑問が浮かび上がる。

そこで、本稿ではこれらの問題点を中心として解決していき、「それは+X」型の転換の本質を明らかにしたい。

## 2. 「それは+X」型に見られる特徴

ここでは、「それは+X」型の構成要素である「X」について論じるとともに、「それは+X」型の生産のルールについて見ていく。

### 2.1 「それは+X」型の「X」について

「それは+X」型によく似ている形式として以下のような形式を挙げることができる。

・話は変わるけど、話は違うけど、話は戻るけど、話はそれるけど、話は飛ぶけど、……

これらは形態的に「話」と助詞「は」が複合した「話は」を持っており、その後ろにそれぞれ異なる要素が来ている。即ち、各形式に共通する要素の「話は」とそれぞれ異なる要素の「～」を持っている。このことから「それは+X」型と「話は～」類は類似する形式であることがわかった。「話は～」類の中で「話は変わる」と「話は戻る」の例を見てみると、

- (1) 「神をばくが信じないで、みんなに話していると思っていますか」「言っちゃ悪いけど、どうも眉つばだと思って、わたしはいつも聞いていますよ」「まあ、あるかなきかの信仰ですから、三堀君にそう言われても、返す言葉はありませんがねえ」信夫は柔和な微笑を浮かべていた。三堀は、神がいるかないか、自分で迷っているのだろうと信夫は思っていた。いずれにせよ集会に出るからには、神を信じたいとは思っているにちがいない。戦争に行く前に一人、帰って来てから一人、三堀は一男一女の父親になっていた。「話は変わりますがね、永野さん。あんた、わたしが戦争に行っている間、ちよくちよく美沙のところに顔を出してくれたそうですね」(塩)
- (2) 昨年度の清流カレッジで、元逗子市長、現島根大学教授の富野暉一郎さんが、『田舎の豊かさ、都市の貧困』というテーマの中で、実感としておっしゃっていました。過疎が問題になっている地方もあるが、都会に出て行こうという若者を引き止めようとするより、むしろ戻るための受け皿を用意する方が大切だと。外に出ないと自分のアイデンティティは見えてこない。まったくそのとおりだと思います。話は戻るけど、さっきの亭主どもは、たいてい女性を馬鹿にしてるんだらう。(www.na.rim.or.jp/~donpapas/private/kang.html)

(1) は神を信じるかどうかという話から全然違う話へと180度変わっている。「話は変わる」は、話し手が話を変えようという意識を持って話題を今までとは違う方向に持っていくときに用いられる。(2) は今まで述べられてきた話からそれ以前の話へと話を戻している例である。「話は戻る」は、これから述べようとする話題を以前のものに戻すことを示している。

上で見たように「～」の部分には「変わる、違う、戻る、それる、飛ぶ…」のように、話をどのような方向に展開させるのかという転換の仕方を表わす要素が来ている。これらの動詞には共通して「今の状態から逸脱する」という語彙的な意味があり、それによって転換が行われるようになる。即ち、「話は～」類の転換の特徴は「～」の部分にあると言える。

この「話は～」類と類似する「それは+X」型も、「話は～」類同様に「X」の部分に転換の本質的な意味があるのではないだろうか。「それは+X」型の「X」の部分にはどのような要素が入るのだらう

うか。従来の指摘に加え、収集した用例の「X」の部分に入り得るものを挙げてみると次のようである。

(3) そうと (そうとして)、それとして、ともかく (ともかくとして)、ともあれ、さておき (さておいて)、いいとして、後にして、またにして、今度にして、おいといて (おいておいて)、いいけど、…  
これらの形式は語彙的な意味からすると、

(4) A : そうと、それとして、おいといて、いいとして、いいけど  
B : ともかく、ともあれ、さておき、  
C : 後にして、今度にして、またにして

のように大きく三つに分けられる。A類は直前の話をとりあえず認めておいた上で、次の話へと転換するもの、B類は直前の話を除外しておいた上で、次の話へと転換するもの、C類は直前の話を後に回しておいた上で、次の話へと転換するものである。Aは「認める」、Bは「問題外にする」、Cは「後に回す」というような共通の意味を持っている。「X」には今までの話題をどのように処理するのかという転換の仕方を表す要素が来ている。即ち、「それは+X」型の転換の特徴は「X」の部分にあると言える。

一方、「X」に入り得る (3) を形態的な特徴から分類すると、

(5) A : そうと (して)、それとして、ともかく (として)、いいとして、後にして、またにして、今度にして、おいといて  
B : いいけど  
C : ともあれ、さておき

のように大きく三つに分けられる。そのほとんどが「～て形」の形態を伴っていることがわかる。

以上のように、「それは+X」型の「X」の要素として、語彙的には“これからの話題からはずす”という意味のものが来ており、形態的には連用形の「～て形」がそのほとんどを占めていることがわかった。次の (6) に見るように「それは+X」型の各形式は、共通の要素「それは」に (4) のような語彙的な特徴と (5) のような形態的な特徴が組み合わされた「X」(例 (3)) がプラスされて出来ているため、一語としては認めがたい、連語やそれに相当するようなものがその多くを占めている。これらの特徴から、「それは+X」型は一定のルールに従って作られる生産性の高い形式であると言えるだろう。

(6) それはそうと (して)、それはそれとして、それはさておき (それはさておいて)、それはともかく (として)、それはともあれ、それはいいとして、それは後にして、それはまたにして、それは今度にして、それはおいといて (それはおいておいて)、それはいいけど…

## 2.2 「それは+X」型の特徴

「それは+X」型の例を見てみると、もっぱら会話文 (例 (7)) か、文章でも聞き手 (読み手) の存在が前提とされる (例 (8)) ような場面に出現している。

(7) ちのぶ「いよいよ、ホントにいいよですね。」しみず「いよいよだね～「北の国から」総集編今夜放送！」ちのぶ「パンパシです！」しみず「それはそれとして飲酒運転の罰則が厳しくなった。」

ちのぶ「話を変えるな！」([http://swimmingview.org/paci\\_mag/data/shimizu/1030075031.html](http://swimmingview.org/paci_mag/data/shimizu/1030075031.html))

- (8) 最近またしても日記というより限りなく月記に近くなってきてる…(汗)。それはともあれ、私は昨日、サイトへの事前報告もせずひっそり博多座へ行って参りました～。事前に色々調べていたこともあってか…(<http://www.memorize.ne.jp/diary/66/80177/>)

「それは+X」型は常に聞き手(読み手)の存在が前提とされる。このように聞き手(読み手)が想定される対立型の場合、話し手は聞き手の視点を対立的に捉えるようになる<sup>(注3)</sup>。従って、話し手は今までの話を外側にあるものとして捉えて「それ」で承けておいて、これから述べようとする話、そのような話し手の観念内の話を次の話題として取り上げようとするときは〈これ〉の視点として捉えるようになるのだと思われる。

- (9) それはそうと、|こんな/\*そんな|噂を聞きましたよ。

- (10) それはそれとして、本題に入ります。

(9)・(10)のように「それは+X」型が述べられることによって、後に述べられることが排他的に「これ」領域であることが読み取れるようになっていられると思われる。「それは+X」型は≪話し手(書き手) vs 聞き手(読み手)≫という構造が明瞭であり、≪「これ」領域 vs 「それ」領域≫の対立を背景に用いられているのではないだろうか。つまり、話し手はそれまでの話が己の観念の外側にあるものとして受け止め、心理的に距離を置いて眺める態度から対象を捉えていると言える。

次の(11)のように話し手が自分の発言を承けてそれを指示する場合でも「それ」を用いることができる。話し手(書き手)が自分の発言を承けてそれを指示する場合、自分の叙述内での指示行為であるため、「これ/それ」いずれの発想も可能であるが、問題は話し手がその話題をどのように受け止めるかであろう。(11)で話し手が自分の発言を「それ」で承けているのは、聞き手の存在を意識して「話し手vs聞き手」の対立型構造を取った発想から生じるものであると思われる。

- (11) 司会「結構ハードな活動をしていますね。それに比べると、私のゼミは…。まあ、それはおいと  
いて、何か、特別な活動などはありますか？」(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/law/zemi.html>)

以上のことから、「それは+X」型における「それ」は話し手と聞き手の対立的な関係のもとで、「これ領域」と「それ領域」の対立を背景として用いられることがわかった。

### 3. 「それは+X」型の個別的な用法

ここでは、「それは+X」型を「X」の語彙的な意味分類である(4)を基準にして、A類の「認める」、B類の「問題外にする」、C類の「後に回す」の三つに分ける。

- 3.1 A類: 「それはそうと」「それはそれとして」「それはおいといて」「それはいいとして」「それはいいけど」

今までの話を一応認めておくと、それをこれから述べようとする話に入れないことを意味する。

- (イ) 「それはそうと」

「それはそうと」は「それは」を除いた「そうと」の形態では用いることができず、必ず「それは」を伴わなければならない。「それはそうと」はこれ以上切り離すことのできない一語意識が強い形式である。田中章夫(1984)は、「それはそうと」は「まったく別の話を切り出して、新たな話題を持ち出すときに用いるもの」であるとする。(12)は前後の話題間にまったく関係のない話が提示される例であるが、(13)は前後の話題は大きく変わっておらず、関連する話題への移行が行われる例である。

(12) 「しかし心を捨てれば安らぎがやってくる。これまでに君が味わったことのないほどの深い安らぎだ。そのことだけは忘れんようにしなさい」僕は黙って肯いた。「それはそうと街で君の影の話を耳にしたよ」と大佐はパンでシチューの残りをすくいとりながら言った。(世)

(13) 「お客さん、すし水が余っているけど、顔でも洗いますか?」「いや……顔よりも、飲ませてほしいね……」「あ、すみません……飲み水は、別にとってあります。」やはり、ビニールにくるんで隠すようにしてあった大きなやかんを、流し場の下から取出して、「生ぬるくなっていますけど、一度沸かして消毒してありますから……」「それはそうと、甕の中の水もすしは残しておかないと、あとの洗いものなんかに困るんじゃないの?」(砂)

(13)は直前の話題と後の話題に内容的に関連が認められる例である。よって、田中氏の説明に「直前の話題と関連する話題を後に持ち込むこともできる」という説明を加えておきたい。

(14) 同居人が1週間ほどうちにいないので久しぶりの気楽さ。やはり同居人と一緒に住むってというのは何かと気を使っているんだと実感する。それはそうとイギリスで洪水がおきているらしい。  
(<http://pws.prserv.net/kakkun/essay/day/day04.html>)

(12)では前の話題が一段落している(しつつある)状況下で、「それはそうと」が用いられているが、(14)では書き手が強引に今までの話を終らせ、自分の興味のある話へと話題を変えている。

(15) 丑松が急いで蓮華寺へ帰った時は、奥様も、お志保も飛んで出てきて、電報の様子を問い尋ねた。  
〈中略〉「それはそうと」と奥様は急に思付いたように、「まだ貴方は朝飯前でしょう」「あれ、そうでしたね」とお志保も言葉を添えた。(破)

「それはそうと」は川端元子(2002)の指摘のように、話し手が会話中にふと何かに気付いたり(例(15))、何かを思い出したり(例(12))した場合、それを喚起させるときよく用いられる。

「それはそうと」の「それ」が(13)・(14)のように前の話を承けていることがわかる場合と、(12)・(15)のように何を承けているのかがはっきりしない場合がある。「それはそうと」が前者のような例で用いられると話を切り上げる方に、後者のような例で用いられると話を切り出す方に傾いてしまうと思われる。それは、(12)・(15)に見るように前の話がある程度一段落されている状況で「それはそうと」が用いられると、話を切り上げるというよりは新しい話を切り出す方に重点が置かれていると読み取れるようになるからではないだろうか。文法化が進んでいるほど「それ」が何を指しているのかがわからなくなり、「それはそうと」の一語意識は強くなる。

「それはそうと」は「それはそうとして」の形でも用いられる。

- (16) 先週末も行ってきました、戸塚。さすがに戸塚は千葉からは遠かったです。それはそうとして。  
やっとこさ、仕事が決まりました。それで、新横浜か綱島か渋谷で働くことになりそうです。

(<http://guhala.virtualave.net/hikaru/BBS/>)

- (ロ) 「それはそれとして」

「それはそれとして」<sup>(註4)</sup>は「それは」を除いた「それとして」単独では転換として用いることができず、必ず「それは」を伴わなければならない。

- (17) 山陰地方というのは、文字通り天候の悪い地方でよく雨が降るが、晴れるとぬけるように碧い空に太陽が輝き、夜は星が、それはまことに原始の姿そのままに美しい光で輝き、私はついにそれのとりことなった。今思うと私はこの星のあやしい魅力にとりつかれ、ついに道を踏みあやまったようであった。本来ならば私は鳥取の山の中でお百姓さんになっていたはずで、こんなところでこんな原稿などを書いたりしてはいないはずであった。それはそれとしてその頃、私は無性に望遠鏡がほしかった。私のうちは望遠鏡などとうてい買うことのできない貧しい家であったけれど、しかしやっぱり望遠鏡がほしかった。(http://www8.plala.or.jp/seijin/ikoh/inaka.html)

- (18) ちのぶ「いよいよ、ホントにいよいよですね。」しみず「いよいよだね～「北の国から」総集編今夜放送！」ちのぶ「パンパシです！」しみず「それはそれとして飲酒運転の罰則が厳しくなった。」ちのぶ「話を変えるな！」しみず「それはそれとして地球の限られた資源は大切にしないとイケない。」ちのぶ「キサマ！水泳の話をする気ないだろ！」

([http://swimmingview.org/paci\\_mag/data/shimizu/1030075031.html](http://swimmingview.org/paci_mag/data/shimizu/1030075031.html))

- (17) では直前の話が本筋から外れていてそれを修正して元の話に戻すときに「それはそれとして」が用いられている。(18)は話し手が勝手に話をどんどん変えていくような場面であり、まったく違う話題に変わっている。

「それはそれとして」は「ひとまずその話は認めた上で、そのままに置いておく」という容認するニュアンスが感じられる。(17)・(18)に見るように「それはそれとして」の「それ」が直前の話を承けていることがわかる。

- (ハ) それはおいといて (それはおいといて)

「それはおいといて」は「おく」の語彙的な意味のように、前の話はこれ以上話さず、そのままにしておくという意味である。

- (19) 司会「ゼミではグループ報告ですか？」学生C「だいたい前期はそうでしたけど、後期になると、自分で報告テーマを決めて、自分で調べて報告、というパターンですね。後はそれをゼミ論文に仕上げて、論文集にしたり。」司会「結構ハードな活動をしていますね。それに比べると、私のゼミは…。まあ、それはおいといて、何か、特別な活動などはありますか？」学生D「…うちでは、合宿があります～」(<http://www2.kokugakuin.ac.jp/law/zemi.html>)

- (20) 川崎社長「うんうん、君の言うとおりの電通の考えるIRがどんなものかはわかってきたぞ。」オカ

ダ君「それを聞いてほっとしました。いつも社長は頑固ですから…。」川崎社長「ん!?何か言ったかね?」オカダ君「あつ、い、いえいえひとり言です…。」川崎社長「それはおいといて、IRの一般論だけ言っているでも話は進まないんじゃないのか? いいIRのためには、一体どこから手をつけたらいいんだ?」(<http://www.dentsu.co.jp/news/ir/index3.html>)

(19) の「それ」は本筋からずれている話し手自身の発言を承けていて、それが話題とあまり関係ないことから、それを除けておいて元の話に話題を修正するような例である。(20) も元の話に話題を修正している例である。このように「それはおいといて」の「それ」は直前の話を承けているのがはっきりわかる。

(二) それはいいとして

「それはいいとして」は話し手にとって直前の話はそれほど大事なことではないため、これから述べようとする話の中に入れなことを意味する。

(21) 「だから、あなたは誰なの?」少しいらだちながら香里が繰り返す。何も言えず固まっていた真琴はそれで我に返る。「…まこと…。沢渡真琴」真琴はうつむきながら上目づかいで言う。「真琴…? どこかで聞いた名前ね」香里が少し考え込みながらつぶやく。「ま、それはいいとして、真琴ちゃん、あたしに用があるんでしょ」

(<http://key.visualarts.gr.jp/kyview/article/s/ssboard/29/bxkmhl/cilmhl.html>)

(22) 今日は健康診断でした。ま、それはいいとして。午後からしばらく事務所を空けるので、午前中はかなり飛ばしてたワケです。( <http://wn.3lism.ne.jp/~bbr02/diary/2002071120.htm> )

「それはいいとして」の「それ」は(21)では「真琴という名前をどこで聞いたか思い出そうとする」、(22)では「今日は健康診断でした」という直前の話を承けている。このように「それはいいとして」の「それ」がはっきりと先行する文脈を承けていることがわかる。

(ホ) それはいいけど

「それはいいけど」は話し手にとって今までの話は問題にならないと判断し、これ以上は触れないことにし、これから述べようとする話が問題視されるというニュアンスが窺える。

(23) 関東の川にアザラシが出没し、話題となっている。居なくなった、見たとか…それはいいけど、たまちゃんと誰が名付けたのだろうか? (<http://www.memorize.ne.jp/diary/16/82970/>)

(24) みさ「ほらあ、いつまで寝てるの?」みん「…うにゅ…眠い…」みさ「明け方までゲームしてるせいでしょ」みん「やめるにやめられなかったんだよ」みさ「というより、セリフ書き留めたりしてなければ、いくらみんでももう少し早く終わったでしょうに」みん「だって面白かったから」みさ「あんなに酷評したのに」みん「あれはストーリーとかに対する評価であって、ノリは別物だもん」みん「HelloAgainもそうだけど、楽しむ観点がストーリーじゃなくてノリだからいいんだよ」みさ「はいはい」みさ「それはいいけど、もう13:30よ。どうするのよ、仕事?」みん「『訊くまでもないわね』」(<http://min.sugama.org/nikki/2000/07/09.html>)

(23) は「多摩川で発見されたアザラシ」の話であるが、「それはいいけど」の後の話は直前の話からずれる話へと話題の移行が行われている。(24) は先行する文脈を指示する「それは」と後件の「仕事は」が対比的な関係にあり、その前後の話が違うことから話題が転換したと言える<sup>(注5)</sup>。このように「それはいいけど」の「それ」が何を承けているかははっきりとわかる。

#### 4.2 B類：「それはともかく」「それはともあれ」「それはさておき」

今まで話されてきた話を問題の外側におくことによって話の転換を行うものである。

##### (イ) それはともかく

「それはともかく」は「それは」を除いた「ともかく」の単独でも(25)のように転換として用いることができる。

(25) それにしても、ホント……お仕事はじまりまして……最近、ネットをまわる時間も見事に減りました。いやいや悪いやら……いや、いいのかも(爆)。でも、会社でもネット見放題っばいんですよね……会社からも更新できるように設定しちゃいますかね(※冗談です。……今のところ。←オイ)。ともかく、早くもって役立てるような仕事ができるようになりたい今日この頃です。「飲み込み悪い……」とか思われていないといいなあ……とドキドキです(苦笑)。

(<http://mattsun.cool.ne.jp/shiningfancy/update-00/update01-04.html>)

森田良行(1989)は、「Aはともかく/Aはともかくとして」の表現は、「Aはそれほどその傾向が強くないのだが、それにひきかえBは……」のニュアンスを帯びるもので、この対比関係の「ともかく」は、後に来るBの部分述べることに主眼がある」とされる。「それはともかく」は「Aはともかく」の文型に「A」の代わりに先行する文脈を承ける指示詞「それ」が入れ替わった形である。従って、「それはともかく」は「「それ」で承ける話は議論の対象からはずして」という意味を表すと言える。

(26) 「新しいものは読まないの?」「サマセット・モームならときどき読むね」「サマセット・モームを新しい作家だなんていう人今どきあまりいないわよ」と彼女はワインのグラスを傾けながら言った。「ジュークボックスにベニー・グッドマンのレコードが入ってないのと同じよ」「でも面白いよ。『剃刀の刃』なんて三回も読んだ。あれはたいした小説じゃないけど読ませる。逆よりずっと良い」「ふうん」と彼女は不思議そうに言った。「それはともかく、そのオレンジ色のシャツよく似合うわよ」「どうもありがとう」と私は言った。(世)

(26) の話し手は「サマセット・モームの本」については十分話されたと判断してそれをこれからの話の対象から外して、「聞き手が着ているシャツ」の方を優先させて述べることによって話題を転換させている。

「それはともかく」は「それはともかくとして」の形でも用いられる。

(27) …今回のセミナーには田中@東洋大学SF研究会がスタッフとして参加した。確か当日は紫のジャージ姿で……すみません話が内輪になりました。えっと、それはともかくとして、彼女が森太郎さんと林哲矢さん相手に爆裂して…([http://www7.cds.ne.jp/~nactor/review/seminor\\_99\\_all.html](http://www7.cds.ne.jp/~nactor/review/seminor_99_all.html))



「それはともかく」は話し手によって前の話をこれからの話の対象からはずすという宣言である。「それはともかく」の「それ」は先行する文脈を承けていると言える。

(ロ) それはともあれ

「それはともあれ」は「それは」を除いた「ともあれ」の単独でも転換として用いることができる。「ともあれ」には前の話は問題にせず、後の話に注目する、という意味がある。

(28) う、う、う、朝から胃が痛い。軽い吐き気がある。うんむ、やはり広島で食べ過ぎただろうかと思えど、時既に遅し(苦笑)。ともあれ今日、明日はマチネとソワレの公演、明後日はマチネの公演があるので… (<http://www2u.biglobe.ne.jp/~kkyoko/diary/1999/9912-37.html>)

「ともあれ」の用法からして「それはともあれ」も前の話は問題にせず、後の話に力を入れているようなニュアンスが窺える。

(29) ようやくコンピューターを購入した。それを言うと、みんなは、きまって、おかしそうにする。なんだ、日本人なのに、コンピューターも持ってなかったのか、おまえも、やっと現代に追いついたんだな、というわけである。それはともあれ、わたしも、せっかくあるのだからと、このところ、コンピューターをいじくりまわしている。

(<http://www.geocities.co.jp/Beautycare/6607/norio1.htm>)

(30) 今回の地方分権改革は、自治体が国との上下関係、支配服従関係に立つのではなく、対等同格だと位置付けた。したがって、これまでのように、国に依存していた他力本願は許されなくなり、自治体は市町村も都道府県も、その進路を自ら決定し、行動の結果に対して責任を負わなければならない。ただ、未ぞうの不況下にあって国も国債に大きく依存しているために、地方分権にとって決定的に重要な地方への財源配分が行われず、自治体が新しい門出に片肺飛行をよぎなくされたのは残念である。それはともあれ、地方分権がここまで進展した背景には、自治体の長や議会、職員が実力を付け、国の後見を受けなくても十分一人立ちできるまでに成長したという実態があった。(<http://www.ashita.or.jp/publish/mm/66/teigen.htm>)

「それはともあれ」は直前の話はそう重要な事柄ではなく、これから述べようとする話が重要視される事柄であるという意味を持った転換の接続表現である。このように「それ」で承ける話とこれから述べようとする話の間には重要度に温度差があり、後の話に焦点が置かれていると思われる。従って、「それはともあれ」の「それ」が何を承けているかははっきりとわかる。

(ハ) それはさておき

「それはさておき」は「それは」を除いた「さておき」の単独でも転換として用いることができる。森田良行(1989)によれば「さておき/さておいて」は、Aの話題をそこで打ち切って他の話題に移ってしまい、もはやAには戻らないという前提を持つ」とする。

(31) マジックの対象が、『横浜』って、どゆこと?いつの間に…。駒田の2000本安打も10本切ってるし。世の中、油断できない…。(そうか?) さておき。昨日、部長に、『うにしまさんのHPのアド

レス教えてよ』と、言われて、めっちゃ、焦った。

(<http://www.parkcity.ne.jp/~junko-k/nikki/9gatu.htm>)

(31) は直前の「横浜ベイスターズ」の話から全く違う話へと話題の転換が行われている。「それはさておき」は「それは当面の関心の外において」の意味になる。

(32) 「内山も三浦同様、というより彼は、ほとんど村垣道場に寝起きをしているらしい。」「おそらく、此処だろうとおもってな。いま西芳寺へ行ったら、出かけたというので」「内山さん。何か用かね?」「三浦さん、汗で、まゆ墨が溶けかかっている」内山は冷やかしたつもりだが、三浦金太郎いささかも動ぜず、「剣術をつかうより、博奕をするほうが骨だ。あぶら汗がふき出して来てね」と、いった。「ふうむ。それはさておき三浦さん。外へ出ぬか。はなしたいことがある」(剣)

(33) 終戦の日だけどそれはさておき。「天才柳沢教授の生活」ドラマ化だって。例によって大好きな漫画のドラマ化にはあまり期待しない… (<http://www.coara.or.jp/~daiki/>)

(32) は話し手にとってそれまでの話は大事なことでないと判断し、それを排除して本題の用件に入ろうとする例である。(33) は「終戦の日」の話についてはこれ以上は触れないことを表わす例である。このように「それはさておき」は前の話をそのままにしておくことによって転換を行っている。

(32)・(33) に見るように「それはさておき」の「それ」が何を承けているのかははっきりわかる。

#### 4.3 C類：「それはまたにして」「それは今度にして」「それは後にして」

発話時を基準にしてその以後を表わす時間関係の表現（「また、今度、後」のような）が用いられており、その部分に転換の本質的な意味がある。今までの話も重要な事柄ではあるが、それよりこれから述べようとする話の方に主眼があることを表している。

(イ) それはまたにして

「それはまたにして」は前の話はこれ以上取り上げず、またの機会に扱うことにするという意味である。つまり、直前の話は当面の場ではなく、別のときに取り上げるという意味である。

(34) この国遺連を開くには約1千500万円かかるのである。そのお金を集めるために今回、全国33地域40箇所であしなが育英会の高校生、大学生を中心とした学生&ボランティアスタッフ500人あまりがいっせいに各地で立ち、呼びかけをした。正直募金とあしなが育英会についてもっと詳しく話をしたいのだけど、それはまたにして、今日は私の募金での経験を話したい。私自信、遺児であるので、毎回あしなが育英会の募金活動には力を入れている。

(<http://himawari.littlestar.jp/diary/2105/0506.htm>)

(35) そうですね。じゃあ次はビートルズですか？(山) それはまたにして今度は尊敬するミュージシャンでいきましょう。部門別で。(http://www5a.biglobe.ne.jp/~thebirds/taidan1.html)

「それはまたにして」の「それ」が何を承けているのかははっきりとわかる。「それ」はそれぞれ(34)では「募金とあしなが育英会」、(35)では「ビートルズ」という直前の話を指している。

(ロ) それは今度にして

「それはまたにして」と同様に「それは今度にして」は前の話はその場では取り上げず、今度の機会に扱うという意味である。つまり、直前の話は当面の場ではなく、別のときに取り上げるという意味である。

(36) ああ、夢のような日々が終わってしまった……たのしかったなあ我が東京での日々。なにがいいってやっぱりゴハン！書きたいことは山ほどあるんだけど、一日じゃ書ききれん。それは今度にして……まったく更新しない間遊びに来てくださった皆さん、どうもありがとう。感謝。感謝。  
(<http://plaza.rakuten.co.jp/comosyd/diaryold/20020802/>)

(37) ちびれい「えるしーえるってがいじんさん？」ワタクシ「いや、人の名前じゃないって」ちびれい「じゃあ、どーぶつ？」ワタクシ「違う（笑）あのエントリープラグの中を満たす液体のことだよ」ちびれい「えんとりーぶらぐ？」ワタクシ「しまった、そっから説明しないといけなかったな。まあ、それは今度にして今日はL. C. Lについてな」ちびれい「うん」  
(<http://www.neo-edden.com/~nabe/tibi5.html>)

上の例のように「それは今度にして」の直前の話も重要な事柄ではあるが、それより後の話の方に重点が置かれて優先されている。「それは今度にして」の「それ」が何を承けているのかははっきりする。(36)・(37)ではそれぞれ先行文脈を承けていると言える。

(ハ) それは後にして

「それはまたにして」「それは今度にして」と違って、「それは後にして」は直前の話をその場の話題から完全に外して他のときに扱うというのではなく、後に回しておいて他の話を優先させるという意味である。つまり、話し手の中では話が順序立てられていてそれに従って話を展開させている。

(38) 「あんさんは、推理小説は好きですか?」「好きですよ」「どのくらい読みました?」「さ、四百冊くらいですかね」「ほう。ほな、この密室をどう解きます?」「わかりませんね。これほど完璧な密室は、解きようがありませんよ」「わては簡単に解きましたかな」「嘘ですよ。解けっこない」「ほんまでんがな」「それじゃあ、聞かせてもらいましょう!」「まあまあ。それは後にして。一傷害致死にするアイデアは、あんさんが考えたんでっしょろ?」「何のことです?」「わかってまっしょろ?刑法には詳しいんでっしょろ?」([isweb31.infoseek.co.jp/novel/megmai/sb1-6.html](http://isweb31.infoseek.co.jp/novel/megmai/sb1-6.html))

(39) 最初に気になるのはもちろんエアシャカールだが、それは後にしてまず稀代の癡馬といってもいいラガーレグルスについて言ってみよう。なんと言っても気になるのはあの出遅れ。

(<http://tomo.prosou.nu/keiba/00derby.html>)

先行する文脈の話も重要な話ではあるが、それより、今から述べようとする話の方に重点が置かれているという話し手の判断から直前の話を後に回すものである。

指示詞「それ」が(38)では「密室のなぞを解いた」、(39)では「エアシャカール」という話を承けていることから、「それは後にして」の「それ」は直前の話を承けていると言える。

#### 4. 「それは+X」型の転換の特徴

以上のように「それは+X」型のそれぞれの特徴を見てきたが、ここでは各形式の共通点や相違点などをみる。

「それは+X」型には必ず言語化された前の話が存在しなければならないが、必ずしも指示詞「それ」が特定の何かを承けているとは言いがたい。「それはそうと」のように一語意識の強い形式は何を承けているのか明確ではない。「それはそうと」の「それ」が何を承けているかはっきりわからない場合は、新しい話を切り出す方に重点が置かれていると言える。従って、次の(40)のようにその場で気付いたことや思い出したことを言うときには、「それはそうと」以外の形式は共起できない。それは、他の形式はとちらかと言うと話を切り上げる方に重点が置かれていて、話を切り出す用法は持っていないからではないだろうか。ところが、「それはそうと」は話を切り上げるだけでなく、話を切り出すことも出来るため、(40)のようにその場で思い出したことについて話を切り出すような場面では「それはそうと」のみが適格となるのではないだろうか。

(40) ～。それはそうと、\* |それはともかく／それはいいけど／それは後にして| こないだ駅前の広場で田中先生に偶然会っちゃったよ。

次に「それは+X」型の特徴を他の転換の接続詞との関係から見てみる<sup>(注6)</sup>。まず、先行文脈との関係から見てみると、「それは+X」型は「ところで」に見られるように先行する文脈との関連を示すことができ、話の流れを以前に戻すことができる。

(41) 「——まあ、こんなわけだね。手錠のままの逃亡ってわけなのよ」「しかし、全く！警察は何をしてるんだ！我々の税金で食わせてもらっておきながら……」「よっぽど沢山払ってるって言い方ね」と純子は笑って、「ところで、|それはともかく／それはいいけど／それは後にして| さっきの話だけど——」(女)

(41)のように「それは+X」型は先行する文脈との関係を示す語（「さっき」のようなもの）とも共起でき、話の流れを以前に戻すことができる。「それは+X」型は前の話に必ずしも区切りがついていないため、その話題に戻ることは可能であろう。

一方、「さて」が用いられる次の(42)のような場面が変わる例においては「それは+X」型は共起できない。

(42) さて、\* |それはともかく／それはいいけど／それは後にして| 次はスポーツコーナーです。

「それは+X」型は今までの話を完全に終わらせて次の話に移行するのではなく、話し手の判断によって直前の話を脇に置いたまま、新しい話を始めるといった転換のマーカであるため、(42)のように前件の場面を完全に断ち切って次の場面を導入するニュースなどの場合には用いられない。そして、

(43)のように最初的话题を切り出すような例でも「それは+X」型は共起できない。それは、「それは+X」型には必ず言語化された前の話が存在しなければならないという制限があるからである。

(43) 【会議の場面で】 さて、\* |それはともかく／それはいいけど／それは後にして| 始めます。

「それは+X」型は本題を提示するときのマーカ―として用いられる。

(44) はじめまして管理人さん。前から一度書きたいと思ってましたが、なかなか書き出せませんでした。しかし、今日書こうと思い、訪問させてもらったものの、何か全部消えていますね (笑)。  
それはそうと | それはともかく、それはいいけど、それは後にして | 本題です。友人の保証人になってました。(http://plaza2.mbn.or.jp/~resetlife/kakolog7.html)

(45) 李氏朝鮮の中期に傑出した学者が出た。儒学者の李栗谷である。さて / ところで / \* | それはそれとして | 李栗谷は幼い頃から聡明な子供であった。

(45) は前置きと本題の関係にある例であるが、「それは+X」型は許容できないと思われる。それは、話題転換マーカ―の前後の情報がすべて単一視点から述べられていて、《「これ」領域 vs 「それ」領域》の対立を形成しないからではないだろうか。この例では《話し手 (書き手) vs 聞き手 (読み手)》という構造の対立が想定されにくい文になっているため、視点は変わっておらず、「それは+X」型は不自然となるとと思われる。しかし、(44) のように話題転換マーカ―の前後で視点が変わっているような例においては、「それは+X」型は共起可能となる。

## 5. まとめ

以上の結果をまとめると、次のようである。

- ・ 「それは+X」型は直前の話は脇に置いていて新しい話題を始めるといった転換の接続表現である。
- ・ 「それは+X」型の「それ」は話し手と聞き手の対立的な関係のもとで、「これ領域」と「それ領域」の対立を背景として用いられる。
- ・ 「X」は直前の話題をどのように処理するかを説明する要素であり、「それは+X」型の転換の本質を担っている。
- ・ 「X」の語彙的な意味と形態的な特徴によって組み合わせられる「それは+X」型は生産性の高い形式である。
- ・ 「それはそうと」は他の形式と異なって文法化が進んでいる接続詞に近い形式であると言える。

## 【注】

- (1) 以下は従来の接続詞の分類や個別の研究の中から話題の転換用法が指摘されている形式を取り上げたものである。詳しくは(注2)と参考文献を参照されたい。
- (2) 順接の接続詞「それで」の転換用法については有賀千賀子(1992)、梶本聡子(1994)があり、逆接の接続詞の転換用法については岩澤浩美(1985)を筆頭に、川口容子(1992)、浜田麻里(1995)などがある。詳しくは各論文を参照されたい。
- (3) 以下の内容は、森田良行(2002)の指摘と筆者の考えをまとめたものである。
- (4) 「それはそれとして」は「お金の話はお金の話として」→「お金の話はそれとして」→「それはそれとして」のようになっており、本来は「XはXとして」の文型として取り上げられる。このように「それはそれとして」はパターン化した表現として用いられる。
- (5) 中溝朋子(1998)は会話における「けど」の例を挙げて接続助詞「けど」は「対比用法」や「展開用法」から「話題転換用法」が生じる場合があるとする。「それはいいけど」は「それは」で承ける前の主題とこれから述べようとする新しい主題とが対比用法のような構造をなしており、後の内容が直前の話と違うことによって転換が行われるのではないだろうか。
- (6) 本稿の目的は「それは+X」型の転換の特徴を明らかにすることにあるため、他の転換の接続詞の詳しい用法についてはここでは問題にしない。よって、本稿では「それは+X」型と従来から転換の接続詞としてよく比較されている「さて」「ところで」との違いについて簡単に言及するに留まる。

## 【参考文献】

- 有賀千賀子(1992)「談話における接続詞の機能について—『それで』の用法を手がかりに—」  
『日本語教育』79 日本語教育学会
- 市川孝(1973)『国語教育のための文章論』 教育出版
- 岩澤浩美(1993)「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』79 日本語教育学会
- 川木冴子(1999)「「そういえば」による文の接続」『東海大学紀要留学生センター』19
- 川口容子(1992)「接続表現の機能に関する一考察—ディスコースマーカー「but」「でも」の標すもの—」『日本女子大学紀要 文学部』41
- 川越菜穂子(1995)「ところで、話は変わるけど—Topic shift markerについて—」仁田義雄編、  
『複文の研究(下)』 くろしお出版
- 川端元子(2002)「「離脱」から「転換」へ—話題転換機能を獲得した「それより」について—」『国語学』210 国語学会
- 甲田直美(1995)「転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって」『日本語と日本文学』21  
筑波大学国語国文学会

- 杉本和之 (1996) 「「そういえば」の意味と機能」『愛媛国文と教育』29
- 梶本聡子 (1994) 「談話標識の機能について—ソレデ・デを中心として—」『日本語日本文学研究』2  
京都外国語大学
- 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能—」鈴木一彦・林巨樹編、『研究資料日本文法4』  
明治書院
- 中溝朋子 (1998) 「「逆接」の接続表現の「対比用法」と「展開用法」について—会話における「けど」  
を例に一」『日本研究教育年報』 東京外国語大学
- 浜田麻里 (1995) 「サテ・デハ・シカシ・トコロデ—転換の接続詞」宮島達夫・仁田義雄編、  
『日本語類義表現の文法 (下)』 くろしお出版
- グループ・ジャマシイ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 角川書店
- (2002) 『日本語文法の発想』 ひつじ書房

**【使用テキスト】** (記述のないものは作例)

赤川次郎「女社長に乾杯！」(女)、池波正太郎『剣客商売』(剣)、三浦綾子『塩狩峠』(塩)、安部公房『砂の女』(砂)、村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(世)、島崎藤村『破壊』(破) — 以上、新潮文庫の100冊CD-ROM、インターネットYahooサイト